えんぽとたんぽの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬	会 報　第77号	２００７年１２月２３日 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会 編集責任者：西原 一誠

１．一年を振り返って（原田　賢治　副会長）

今年のカレンダーも残り少なくなり、一週間余りとなりました。会員の皆さまには、新しい年を迎える準備等で何かと気忙しい此頃と思います。

さて、この一年を振り返ってみると、大きな台風の襲来もなく、計画された各活動行事も予定通り実施することが出来ました。

今年、新たに挑戦したことは、６月下旬から始まった合鴨農法による合鴨達の飼育です。受け入れ準備で飼育小屋が完成した頃、予定外の出来事で、池の浮島で確保したカルガモの卵をチャボに抱かせたところ、３羽の雛が誕生しました。

６月１８日には、予定した合鴨の雛５羽も到着し、水に浮く訓練をしながら７月２日に厄除神事と二俣瀬小学校の学童９名による放鳥式を行ない、合鴨が元気で無事活動してくれることを参加者全員で祈願しました。以来、合鴨は水田、カルガモは蓮池と住別をして、同時飼育の日々となりました。

７月５日から約一ヶ月、会員の輪番制で飼育当番を担当することとした。この間各自が楽しさと自然の厳しさを感じられたことと思います。お陰さまで、カルガモ３羽は７月下旬から８月上旬にかけて、それぞれ野生に飛び立ち、厚東川流域で他の仲間と語りながら楽しく元気に泳いでいることと思います。

一方、合鴨は稲の穂が出始める盆過ぎでその役目を終え、蓮池の小屋をねぐらとし、ビオトープを訪れる人達のアイドルとして、寒さにも負けず悠々と泳いでいます。

秋の収穫も、もち米は平年並の約１８０ｋｇ、そばの実は天候にも恵まれ、近年にない大きな粒の実となり約１９ｋｇの収穫がありました。

今年は校区の文化祭農産物展示会へ、もち米（合鴨農法による無農薬米をアピール）、そばの実、椎茸の３点を出品しました。審査の結果（審査員は農林事務所の職員）もち米２等、そばの実３等と入賞しました。収量、品質共これは合鴨の働きによる効果が大きいと思います。餅についた味はいかがでしたか？

自然観察隊の活動も、お天気にも恵まれ計画通り充実した活動が出来たことと思います。これも各指導者の協力の賜です。ありがとうございました。

新しい年も、いろいろと行事が計画されます。多くの会員の参加と、ご指導ご協力を得て更に活動の輪が拡がるようお願いします。皆様、お揃いでよい年をお迎えください。

２．活動報告（事務局　記）

― １１月３０日（金）餅つき準備として、お米を研（といだ）り、ダイガラや石臼を運んだり、テント張り等の準備をしました。

― １２月１日（土）収穫祭ｐａｒｔ-１（餅つき）が初冬の二俣瀬ふれあいセンターにてとり行われました。毎年餅苗を頂いているＪＡ山口宇部農協の吉本組合長理事に搗きはじめをダイガラにて行なっていただき約２俵のもちを１１時半には搗き終えました。　参加者は二俣瀬小学校校長先生ほか１２名、保護者７名、里山自然観察隊２３名、及び幼児８名と父母会員１５名及びつくる会会員３０名総勢計９５名のイベントとなりました。今年は合鴨農法による自然環境に優れた雰囲気でつくったもちでした。

― １２月１５日（土）蕎麦うちの収穫祭を取り行ないました。参加者は会員１８名と「里山自然観察隊」隊員１７名保護者会員１５名と幼児５名合わせて５５名でした。蕎麦は機械粉挽きの分

ほか石臼での粉挽きを各自経験していただき、合わせて約７ｋｇを西原隊長、三宅会員らの指導で蕎麦の手打ちを行い“かけそば”にて美味しく頂きました。特に今年の蕎麦は品質良く出来たことと女性会員がつくられたかけ汁も良く出来ていて、合わせて最高の味ではと思いました。残りの６．５ｋｇの粉は会員ほか購入希望者に販売しました。

― １２月２３日収穫祭 Part-３として蓮根堀、くわい堀と椎茸狩りを行い、１１時半から忘年会を致しました。永山酒蔵の濁り酒とシシ肉で今年最後の活動を楽しく、又腹からの意見も出て来年の参考にする事が出来る有意義な一日でした。２５名の参加でした。

３．今後の予定（事務局　記）

◎　見学者

日付未定（来年４月ごろ）青年会議所環境学習　１００名程度遊ロードからビオトープ

◎　行事

― 平成２０年の初集会は１月１９日（土）です。間違いのないよう願います

４．来訪者の声　（東屋のノートより一部抜粋）

今月はありません

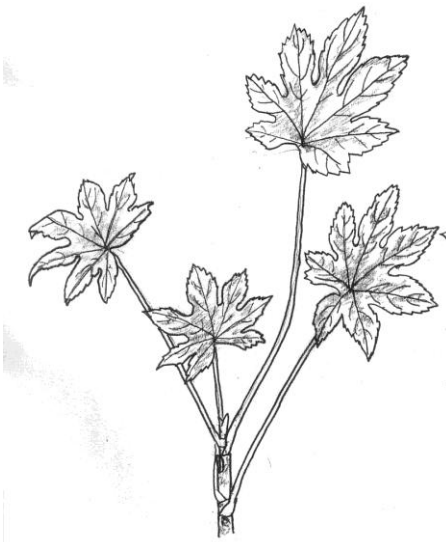
５．ビオトープ関連（ビオトープ周辺の植物）　美濃和　信孝

ヤツデとカクレミノ

ヤツデはウコギ科の常緑低木で、庭木としておなじみです。大きな特徴的な葉は、人を招くという「千客万来」の縁起を担いで玄関先や門の脇に植えられ、また天狗の葉団扇と呼ばれ、邪気を払うともいわれます。それほど大きくならず、剪定などの手があまりかからないのも庭木として好まれている理由でしょう。自生地は海岸沿いの林内ということですが、人の庭から二次的に広がって自生している木が多いようです。しかし、関東では、ヤツデはアオキやシュロとならんで林内によく生えているのですが、山口ではとても少なく、特に二俣瀬では神社の境内に数本生えているのが唯一でした。ヤツデは花の少ない冬に花を咲かせる数少ない木です。茎の先に小さな白い花がたくさん集まって直径３～４センチのピンポン球のような塊りを作り、天気がよく暖かい日には、アブやハエなどの昆虫がたくさん訪れ、蜜を吸っています。糖度５０％という非常に濃い蜜は、この時期に成虫で冬越ししているアブやハエなどにとってはたいへんな御馳走です。それだけでなく、ヤツデの花は初めにおしべが成熟して花粉を供給し、その後にめしべが成熟して花粉を受けいれる雄性先熟という仕組みを持っています。花の少ないこの時期をあえて選んで、濃い蜜と雄性先熟という仕掛けで確実な受粉をしようという戦略は驚くばかりです。

カクレミノは、同じくウコギ科の常緑小高木で、二俣瀬近辺ではよく見られる木です。庭木としても植えられます。名前の由来は、三裂した葉の形がおとぎ話の「隠れ蓑」に似ているところからついたということです。この木の葉は変異が多く、成木は楕円形の葉をしていますが、幼木は三つあるいは五つに深く切れ込み、ヤツデと類似したような葉になることもあります。同じ１本の木でも、日のよく当る上の葉は切れ込みがなく、日当たりの悪い下の葉は切れ込むなど変幻自在の様を見せます。一般に、林床のような暗い場所では下の葉にも光が当たりやすいように切れ込みのある葉を形成した方が有利で、充分に光が当たる状況になると厚くて面積の狭い葉を付ける事が有利になる、と言われています。高橋(1997)はカクレミノの葉の形態と照度の関係を研究し、切れ込みのない葉は、葉の密度が大きい陽葉で、相対照度が３０％以下になると掌状に分かれた葉が多くなり、掌状の葉は葉の密度が小さく、光補償点の低い陰葉であるという結果を導き出してます。照度に応じて葉の形を変えるとはとても不思議な能力です。カクレミノは夏に花を咲かせ、今は黒い実がヤツデの花と同じような丸い塊状に固まって付いています。この実は、ヤツデと同じように鳥によって散布されますが、実の大きさからもわかるようにヒヨドリが一番の散布者です。

参考文献：高橋和成(1997)　カクレミノの異形葉に見られる環境適応．岡山朝日研究紀要、No.18



ヤツデ（ウコギ科）

カクレミノ（ウコギ科）

６．会員の声

今回もありません。

７．会よりの連絡事項　（事務局より）

１月１９日（第三土曜日）平成２０年の初集会です。協議することも多々ありますが、やまぐちきらめき財団さんが活動見学にこられます。水車水路の修復を予定しておりますので多数参加ください

尚　新水路は当二俣瀬の歴史遺物である「駒の頭」方式にする予定で、その為前もって噴水出口の間伐材を１月１２日（土）市小野から運搬します。応援者を２～３名依頼します。

８．編集後記

今年も、あとわずかになり、年々1年が早くなってきているのを実感しています。　この１年、暖かい冬に始まり、暑い夏、寒くならない秋、季節の移ろいがおかしくなってきているようですが、山々もすっかり葉を落とし、季節はやはり冬。油の値段も高くなり、地球温暖化防止を唱えながら、一方では、暖かい冬（油は節約できるし、道は凍らない）を願っているこの頃です。

さて、今年は、カモの年でもありました。カルガモたち、元気に泳いでいるかなあ？そして、アイガモたち、おいしいお餅をありがとう。来年は２世の誕生があるのかな？楽しみですね。

皆さん、１年間お疲れ様でした。よいお年をお迎えください。

（藤井　義晴　記）